

ソシユールの用語法に
ついでの考察
——用語「記号」のゆらぎ——

高木敬生

博士課程後期2年

1. 序

言語学者ソシュール (F. de Saussure) については、もはや多くを語る必要はないであろう。ソシュールは、一般言語学について、その体系的な概念をまとめなかったにもかかわらず (あるいはまとめなかったからこそ)、20 世紀の言語学に多大なる影響を与え、その影響は言語学を越えて諸学問にも及ぼされたとされる。

そうしたソシュールを研究するにあたり、現在、その指針として二つの方向性が見出される。一方では、ソシュールの思想をさらに理論的に応用する発展的な方向性¹⁾、他方では、手稿などの資料を用いてソシュール自身の思想の再構築を図る広い意味での文献学的な方向性²⁾、の二つである。本稿の目的はその後者にあたる。

さて、ソシュールの「記号」の用法を検討するにあたり、まずは『一般言語学講義 (*Cours de linguistique générale*)』³⁾ (以下『講義』) におけるソシュールの記号理論を簡単にまとめてみよう。ソシュールは一つの言語記号 (「シニニュ (signe)」) が「シニフィアン (signifiant)」と「シニフィエ (signifié)」から成り、その両者の結びつきには自然的必然性が無い、つまり恣意的であるとした。だが、その結びつきは恣意的であるにもかかわらず、言語共同体に所属する個人の意志では自由に切り離したり組み合わせたりして使用することはできないという強制力を持つものでもある。そうした諸々の言語記号は連辞的な関係と連合的な関係——辞項の並べ方についてのルールと辞項間の置き換え方についてのルール——によって体系をなし言語を構成している。

こうした言語記号と体系性の概念に端を発し、より一般的に記号全般を扱う科学として記号学が提唱されるのだが、それに対する後継者らの姿勢は体系よりも記号の構成要素の、つまり「シニフィアン」と「シニフィエ」との関係に向かっていたように思われる。

例えばバンヴェニスト (É. Benveniste) は、ソシュールにおいて言語学と記号学との関係性はそれほど明確ではないとしながらも、両者を結びつけ

るのが言語記号の恣意性であるとしている。⁴⁾つまり、バンヴェニストは恣意性こそソシュール言語学の中心的なものとして、記号学的探求においては言語記号の恣意性が中心的な役割を果たすと考えていたといえる：

Ce qui rattache la langue à la sémiologie est ce principe, posé au centre de la linguistique, que le signe linguistique est «arbitraire». D'une manière générale, l'objet principal de la sémiologie sera «l'ensemble des systèmes fondés sur l'arbitraire du signe».⁵⁾

このバンヴェニストの指摘——記号学の対象は記号の恣意性を基盤とする諸体系の全体である——にみられるように、『講義』における言語記号の構図（「シーニュ」＝「シニフィアン」／「シニフィエ」）はその後の記号学の基礎にもなっていることが分かる。例えばプリエト（L. J. Prieto）の記号理論は、信号（「シニフィアン」）とそれがもつメッセージ（「シニフィエ」）の一体を記号と見て、さらにそれが示しえるものと示しえないものを集合論的な関係として捉えているものであると考えられる⁶⁾。バルト（R. Barthes）もまた、「記号学の対象とする記号も、そのモデルである言語記号と同じように」⁷⁾とシニフィアン・シニフィエの関係から出発し、イェルムスレウ（L. Hjelmslev）の理論の、記号それ自体をメタ次元のシニフィアンとみることで、それに対応する新たな意味作用が生じうるということを応用した。前者がデノテーション（外示）、後者がコノテーション（共示）にあたり、バルトは後者にマスメディアのイデオロギーを見出だそうとする。この構造は、意味作用の多次元化とも言えるだろう。こうした研究は言語における意味の研究領域を発展させたという意味で大いに意義のあるものであった、というのも、ブルームフィールド学派らアメリカ構造言語学は意味の領域を言語研究から徹底して排除していたからである。

ただし、ソシュールの記号理論は、実際は、彼の三回にわたるジュネーヴ大学での一般言語学講義のうちで第三回目にして初めて現れた理論であった。対して記号学という学問自体は第一回講義ですでに言及され、その必要性について述べられたのは、実は第二回講義である。さらに、ソシュ

ールは「シニフィアン」・「シニフィエ」を使用するにいたるまで、用語にかなり揺らぎがあったことはバルトが指摘する⁸⁾とおりである。ということは、記号学を考察した時点でのソシュールの用語「記号」は理論としての「シーニュ」とは異なる意味であった可能性があるのだ。この可能性を探ることは、ソシュールの理論やその変遷と、さらに先にある可能性を明らかにする上で、無駄にはならないと思われる。

なお、本稿が利用したソシュールの資料は以下の略号をもって示し、他は適宜書名を示す。

略号

CLG——Saussure, Ferdinand de, 2005 *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bailly et Albert Séchehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Ed. critique préparée par Tullio de Mauro, postface de Louis-Jean Calvet, Paris, Payot

CLG1/K——Saussure, Ferdinand de, 1996 *Premier cours de linguistique générale (1907) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger: Saussure's first course of lectures on general linguistics (1907) from the notebooks of Albert Riedlinger*, French text edited by Eisuke Komatsu / English translation by George Wolf, Oxford, Pergamon

CLG3/K——Saussure, Ferdinand de, 1993 *Troisième cours de linguistique générale (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin: Saussure's third course of lectures on general linguistics (1910-1911) from the notebooks of Emile Constantin*, French text edited by Eisuke Komatsu/English translation by Roy Harris, Oxford, Pergamon

ÉLG——Saussure, Ferdinand de, 2002 *Écrits de linguistique générale*, établis et édités par Simon Bouquet et Rudolf Engler avec la collaboration D'Antoinette Weil, Paris, Gallimard

2. ソシユールにおける「記号」の用法

2-1. シニフィアン／シニフィエ導入以前の手稿

ソシユールは「記号」という語をどのような意味で用いていたのだろうか。

まず、おそらく「シーニュ」⁹⁾を「シニフィエ」と「シニフィアン」とに区別することを着想する前の時期の、ソシユールの手稿にはこのような一節がある。

II. *Domaine linguistique de la pensée qui devient IDÉE DANS LE SIGNE ou de la figure vocale qui devient SIGNE DANS L'IDÉE* : ce qui n'est pas deux choses, mais une, contrairement à la première erreur fondamentale. Il est aussi littéralement vrai de dire que le mot est le signe de l'idée que de dire que l'idée est le signe du mot ; elle l'est à chaque instant, puisque'il n'est pas possible, même, de fixer et de limiter matériellement un mot dans la phrase sans elle.

Qui dit *signe* dit *signification* ; qui dit *signification* dit *signe* ; prendre pour base le *signe* (seul) n'est pas seulement inexact mais ne veut absolument rien dire puisque, à l'instant où le signe perd la totalité de ses significations, il n'est rien qu'une figure vocale.

La distinction fondamentale et unique en linguistique dépend donc de savoir:

— si on considère *un signe ou une figure vocale comme signe* (Sémiologie = morphologie, grammaire, syntaxe, synonymie, rhétorique, stylistique, lexicologie etc., le tout étant inséparable), ce qui implique directement quatre termes irréductibles et trois rapports entre ces quatre termes, tous trois devant être en outre transportés par la pensée dans la conscience du sujet parlant;

— ou si on considère *un signe ou une figure vocale comme figure vocale (phonétique)*, ce qui entraîne ni l'obligation immédiate de considérer un seul autre terme ni celle de se représenter autre chose que le fait objectif ; mais ce qui est aussi une façon

éminemment abstraite d'envisager il n'EXISTE linguistiquement que ce qui est aperçu par la conscience, c'est-à-dire ce qui est ou devient signe.¹⁰⁾

この引用箇所では、「シーニュ」「シニフィエ」「シニフィアン」という用語に当てはまりうる語が数種類出ている。つまり「観念」「思考」「記号」「声音型」である。

ここでは、まず「最初の基礎的な誤り (la première erreur fondamentale)」として、「記号」と「観念」とが別々の二つの辞項として存在するかのように見做すことが批判され、両者は「一つである (ce qui n'est pas deux choses, mais une)」といている。しかし、この「一つ」の「記号」/「観念」という語について考察するためには、ここでの対になった二組の用語のそれぞれを明確化する必要があるだろう。つまりばらばらになっていると考えられていた「思考の言語的領域 (Domaine linguistique de la pensée)」と「記号における観念 (IDÉE DANS LE SIGNE)」及び、「声音型の言語的領域 (Domaine linguistique [...] de la figure vocale)」と「観念における記号 (SIGNE DANS L'IDÉE)」との二組が何を示すのかということである。

ただし、ソシュールがその記号理論を導入した背景を知っておくことは、遠回りのようだが、後の理解に役立つものと思われる。『講義』などにみられるソシュールの記号理論は、一つの「シーニュ」(特に音声記号)において、それが示す概念面「シニフィエ」と表現面(聴覚像)「シニフィアン」とを区別するのだが、何故その区別が必要であるか。講義によれば¹¹⁾、当時の「記号」という語の「慣用 (l'usage courant)」は一般的に聴覚印象のみを指し示していた。しかし、実際はラテン語 arbor を記号とみなしたといっていて、それに対応する「樹」の概念もまた想起されているのである。つまり実際は、「記号」は聴覚印象だけでなく、それに対応する概念も含む全体を暗示しているのであるが、人はそのことを「忘れてる」のである。こうした用語法の「曖昧さ (ambiguïté)」を解消するための方法についての『講義』の一節が以下のものである。

L'ambiguïté disparaîtrait si l'on désignait les trois notions ici en présence par

des noms qui s'appellent les uns les autres tout en s'opposant. Nous proposons de conserver le mot *signe* pour désigner le total, et de remplacer *concept* et *image acoustique* respectivement par *signifié* et *signifiant* ; ces derniers termes ont l'avantage de marquer l'opposition qui les sépare soit entre eux, soit du total dont ils font partie. Quant à *signe*, si nous nous en contentons, c'est que nous ne savons par quoi remplacer, la langue usuelle n'en suggérant aucun autre.¹²⁾

これによれば、「記号」という語が聴覚像だけを意味する用法が一般的で、ソシュールにとっての「記号」という語の使用法と曖昧になってしまうから「シニフィエ」と「シニフィアン」の用語を導入するという。つまりこれは曖昧さを解消するための用語なのである¹³⁾。

さて、この用語法でいうと、先に挙げた引用の「一つであるもの」もしくはその少しあとにある「語 (mot)」が「シーニュ」にあたると考えてよかろう。これに則れば、一つであるのが「記号」／「観念」である以上、「記号」が「シニフィアン」の、また「観念」が「シニフィエ」の対応物として当時は使われていたと考えられる。(さらに言えば、「記号の中の観念」、「観念の中の記号」という対応からも明らかのように、上述の「記号」と「観念」との対応が、『講義』においてシニフィアン・シニフィエの恣意性へと発展することも分かる。) つまり、ここでの「記号」とは、まさに先にみた背景においてと同様、聴覚像のみを示すものとして使われているのである。

さらに論を進めよう。ソシュールは研究対象として言語を扱うにあたり、そこに含まれるものと含まれないものとの区別に慎重であったことは確実である¹⁴⁾。「思考」と「声音型」の両者のうち「言語的領域」に限定されるものが「観念」であり「記号」なのであるから、前二者は「観念」や「記号」よりも広い(言語に含まれない)範囲を意味として含むことは明白である。まとめると以下ようになる。

思考 > (記号における観念 → シニフィエ)
声音型 > (観念における記号 → シニフィアン)

それでは、「思考」と「声音型」とはなんであるのか。

「声音型」は次の文から示唆されるものが何であるかすぐに分かるであろう。つまり、「記号がその意味作用の全体性を失うとき、それは声音型以外の何ものでもなくなる (à l'instant où le signe perd la totalité de ses significations, il n'est rien qu'une figure vocale)」とあるように、「記号」は何らかの対応するものを意味するがゆえに「記号」なのであって、そうした意味作用のない「記号」(とくにここでは音声記号を指す)とは、ただの「声音型」、つまり単なる音でしかない、つまり言語音ではなく物理音とみなされるのである。そうした物理音としての声音研究は、『講義』によれば、調音の生理学たる音韻論¹⁵⁾(つまり生理音声学)が扱うべきものである。¹⁶⁾

次に「思考」に関しては、言語というコードに従って「観念」化(言語化)される以前の個人的「思考」を指すと考えられる。言語がある程度の限定的コードである以上、「思考」も言語化されるに当たってある程度限定されると考えれば、「思考」とその「観念」がイコールではない場合もあることが分かるだろう。したがって、「思考の言語的領域」とは思考を言語というコードで置き換えた結果であり、その結果、ソシュールの記号理論においてシニフィエにあたる部位を成すのである。つまり、「観念」化が言語によるものであると考える以上、「思考」それ自体もまた言語学の対象とはなりえないはずである。

そうして整理すると、この引用箇所は、言語に含まれない「思考」や「声音型」がどのように言語に含まれる「観念」や「記号」に関わるのかをも考えていることがわかる。それをより明確化してソシュールの記号理論との対応関係を理解すれば、おのずから「記号」という用語がどのような性質のものとして使用されていたのかもわかるはずである。そのためにも、引用文の続きを解釈する必要があるだろう。

まず、「言語学にとっての基礎的で独特な区別」というのは言語記号をどのように見るかの視点に関わるとしている。つまり、意味作用によって観念と結びついた記号としてか、あるいは意味作用のない声音型としてか、である。それぞれに「記号学」、「音声学」¹⁷⁾の用語を当てていることから、前者が共時的な体系の研究であり、後者が通時的な言語音の変化の研究で

あることがわかる。また、対象をシーニュとしてみなす場合、つまり共時的研究の場合、4つの項（これは前に挙げた「思考」「観念」「記号」「声音型」にあたると思われる）とそれらの間に成り立つ3つの関係（思考／観念、観念／記号、記号／声音型¹⁸⁾）を含意し、「それらの関係すべては話す主体の意識において頭の中で移り渡る」（例えばある思考から順を追って声音型へ）としている。

さて、第三回講義で用いられるシニフィアン・シニフィエの用語にあたるのは、「記号」と「観念」のそれぞれであるということは先にみた。つまりここでいう「記号」とは意味作用の担い手ではあるが、用語としてのシーニュのように、それ自身に意味作用が含まれるわけではないのである。

2-2. 第三回以前の「記号」の用語法

それでは、実際に生徒を相手に話された講義のなかでの記号の用語法はどのようであったのだろうか。『講義』での記号理論に比較しながらこちらも検討しておくべきであろう。

まず、第一回講義での「記号」の用語法は第三回講義のような意味作用を含むものとしての「記号」とは異なるものである。結論から言うと、第一回での用語「記号」も、前述した使い方の「記号」とほぼ同じ意味、つまりシニフィアンにあたるものとして使っている。例えば以下の文を見よう。

... Quand le mot écrit ne concorde plus avec le parlé, c'est le signe écrit que l'on incrimine; bien à tort, car c'est du côté du son parlé qu'il faut chercher la cause du désaccord: le signe écrit, lui, est resté immobile, et pendant ce temps le son changeait suivant en cela le développement naturel de la langue.¹⁹⁾

ここでは発音に対して表記が一致しなくなった場合に、その不一致の原因をどこに求めるかが議論されている。ここでの「書かれた語」と「話された語」との不一致とは「記号」の不一致であると解釈できる。つまりは「シニフィアン」である。というのも、不一致が明らかになるのは同じ「シニ

フィエ」を共有しているからであり、つまりは「シニフィエ」は不動なのである。

ここでソシュールが主張していることはつまり、書かれる「記号」こそが言語音（「シニフィアン」）の代替物であって、両者が食い違ったときに正当性を書記記号に認める傾向が誤っていると非難しているのである。

結局、この文章の「記号」は「シニフィアン」に対応しているのであるから、引用文において第三回講義の理論でいう「シーニュ」に対応する用語は「語」と言える。そして、この用語法は前述の引用とも符合するものであり用法に差異はないと考えられる。このことを裏づけるために、以下の引用も見てみよう。

Il faut noter un fait de signification (...): la tendance mécanique de la langue, si un concept composé lui est donné dans un signe déterminé, de le rendre simple, indécomposable, la tendance de prendre le chemin de traverse, la simplification de l'idée: de deux ou trois données on finit par ne plus apercevoir que celle «qui est entendue.²⁰⁾

このくだりは第一回講義後半部、類推的变化における膠着現象について述べた部分からの引用である。膠着とは、文を通して与えられる二つの語が一つの語に統合されること（例えば《tous jours》→《toujours》、《au jour d'hui》→《aujourd'hui》など）とされる。この現象は、たとえば「青い果汁」le vert jus が頻繁な使用により複合し、その合成概念から新たに「酸味ブドウ果汁 (le verjus)」のような「単一で分解不能な (simple, indécomposable)」語を作り出すというものである。引用に従えば、「記号」《le vert jus》に当たるものとして概念（観念）の合成（例：酸味ブドウ果汁）が先に生じ、それに合わせて言語が三つの「記号」《le vert jus》を《le verjus》という一語に単純化することと読み取れる。つまり、ここでの「記号」もまた、「シーニュ」というよりは、概念つまり「シニフィエ」と対応した「シニフィアン」としての「記号」を意味していると読み取れるだろう。

加えて、第一回講義での特徴としては、「記号」という語は前半部、つま

り音声についての考察の中で使われることがほとんどである。また、後半の類推的变化についての部分では「記号」という語が用いられるのは上の例が唯一の箇所となっている。つまり、第三回講義でいう「シーニュ」の使い方ではなく、意味作用によって概念（あるいは観念）と結合するものが「記号」という語で表現されていると考えられるだろう。観念を概念と変更した点があるが、「記号」という語は「シニフィアン」と等しい意味（『講義』によれば「慣用」的な意味）で使われている。

次に第二回講義についてだが、学生のノートにこの講義で記号学がどういった学問であるのか言及されている箇所がある²¹⁾。これは先に挙げた『講義』の箇所にも該当するものである²²⁾。参照してみよう。

N'est-il pas évident qu'avant tout la langue est *un système de signes*, et qu'il faut recourir à la science des signes, qui nous fait connaître en quoi peuvent consister les signes, leur lois, etc. Ce serait une sémiologie (aucun rapport avec la sémantique: science des sens des mots de la langue, par opposition à celle des formes). Il est évident aussi que la langue n'embrasse pas toute espèce de signes. Il doit donc exister une science des signes plus large que la linguistique. (Systèmes de signes: maritimes, des aveugles, des sourds-muets, et enfin le plus important: l'écriture elle-même !)²³⁾

この引用から、言語は記号の体系だと考えられていると分かる。この点は『講義』とも食い違うものではない。そして、その記号の体系を研究するために用いる「記号の科学 (la science des signes)」は「諸記号やその規則などが何から構成されるのかをわれわれに知らせる (qui nous fait connaître en quoi peuvent consister les signes, leur lois, etc.)」ものであるという。

さて、まずは「記号」という語の使い方について考察してみよう。

この講義でも第一回講義と同様に意味作用を含む「シーニュ」に対応するのは「語」と考えられる。たとえばこの一節より前には「言語の諸語以上に恣意的なものは何もないのではないか。(Y a-t-il rien de plus arbitraire que les mots de la langue ?)」²⁴⁾と述べられており、これは「シニフィ

アン」と「シニフィエ」との結合を連想させるものである。さらにそのあとに述べられている「声音は、それが意味に、正確に、一定して、繋がれている限りでしか語ではない。(Le son vocal n'est un mot que dans la mesure exacte, constante, qu'il lui est attaché un sens.)²⁵⁾」という一文は、まさに第三回講義でいうところの「シニフィアン」と「シニフィエ」の結合に対応すると考えられる。したがって、ここでいう「語」という用語が第三回講義の「シーニュ」に対応すると考えて差し支えないだろう。

「記号」という用語については「記号の恣意的性格 (Le caractère arbitraire du signe)²⁶⁾」とか「諸記号は恣意的であるというだけで十分である (Il suffit de dire que les signes sont arbitraires)²⁷⁾」などの言い方を見ると、「シーニュ」の恣意性を想起させられ、「シニフィアン」と「シニフィエ」の意味作用を考えているかのように思えるかもしれない。しかし、「記号と観念の結合においては、本来的にその記号とその観念を結びつけるもの自体何もない。(Dans l'association du signe à l'idée, il n'y a rien qui lie en soi ce signe à cette idée.)²⁸⁾」ということからも明らかのように、やはりここでいう「記号」は「シニフィアン」と同じ、つまり前述したところまでと同様の意味で用いられていると考えるべきであろう。しかし、では「記号の恣意的性格」とは何であるかという疑問にも答えを出すべきであろう。例えば立川の解釈²⁹⁾にのっとり、ソシュールが主に「聞く主体」を立てていたと考えればどうだろうか。つまり「シニフィアン」は聞き手の立場からすると常にある「シニフィエ」に結びつくのである。この「シニフィアン」のいわば能動的な結合が念頭にあるがゆえに、その仕方を恣意的な性格と表現したのではないだろうか。そうして、第二回講義までの「記号」とは「シニフィエ」と恣意的に結びつくような「シニフィアン」を指していると考えられる。こうして、恣意性の概念が導入され、「シーニュ」の理論へと近づいていることが分かる。

2-3. 第三回講義における「記号」とは

さて、以上のように第二回までの「記号」という語の意味を考察してきた。

しかし、『講義』の骨格をなすとも言える第三回講義に触れていないのは問題であろう。なぜなら、第三回講義に記号学について言及される箇所です。「記号」という語が使われているのだが、実はその箇所はシニフィエとシニフィアンの結合としてのシーニュ概念を打ち出す前であり、記号という語の使い方についても意味作用を内包したシーニュとしてのものではない。以下の引用を見てみよう；

une fois la langue dégagée de ce qui ne lui appartient pas, elle apparaît comme classable parmi les faits humains. C'est un système de signes reposant sur des images acoustiques.

〈Association d'une idée avec un signe, c'est ce qui fait l'essence de la langue.〉

D'autres systèmes de signes: ceux de l'écriture, signaux maritimes, langues des sourds-muets. Tout un ordre de faits psychologiques (de psychologie sociale) qui ont droit d'être étudiés comme un seul ensemble de faits.

Compartiment dans la psychologie: la sémiologie (études des signes et de leur vie dans les sociétés humaines).³⁰⁾

「聴覚像に支えられる記号の体系 (un système de signes reposant sur des images acoustiques)」とあることから聴覚像つまり「シニフィアン」が体系を支える重要な要素であると読み取れる。また、「観念の記号との結合、これが言語の本質をなすものである (Association d'une idée avec un signe, c'est ce qui fait l'essence de la langue)」とは、ここでの「記号」という用語が後の用語法でいう「シーニュ」を指していないことが読み取れる。以上から、ソシュールが記号学を提唱した際に使った「記号」という用語は、三回の一般言語学講義を通じて、実際には後の記号理論に見られるような「シーニュ」と完全に対応するものではなく、むしろその一部分、つまり「シニフィアン」と対応するものであるということが分かる。記号学が扱う「記号」

とは、何かしらの概念もしくは観念と恣意的な絆で結びつくような、意味作用の媒体となる、具体的な存在である。この具体的な存在である記号が体系をなすがゆえに、この体系はその類似や差異を考察可能なのである。

3. 結 論

ここまで、ソシュールが、その記号理論（「シーニュ」＝「シニフィエ」／「シニフィアン」）に至るまでの用語の経緯を見てきた。それによれば、彼の用いた「記号」という用語は、第二回講義まで、「シニフィアン」にあたと考えられる。そして、第三回講義において、その用語が変更されたのが1911年5月19日の講義³¹⁾であった。この講義が転換点となり、ソシュールの記号理論はそれ以前の記号の用法といわば決別することになるといえるだろう。しかしながら、それ以前においてもソシュールは慣用的な用語法の曖昧さを問題視していたことは明らかである。というのも、見てきたように、ソシュールは一貫して「記号」という語を言語記号の音声面に当たるものとして述べてきたからである。

『講義』にならえば³²⁾、ソシュールは「コトバ（ランガージュ、langage）」における言語学の研究領域を心的側面に限っていた。さらに、「社会的になるのが心的部分全体ではないことも指摘しておこう。[そこでは]個人が主のままである。（Remarquons aussi que se n'est pas toute la partie psychique qui devient sociale. L'individu reste maître.）³³⁾」という第三回講義の言からも、明らかなように、ソシュールは心的側面の中からさらに社会的側面を切り離すことによって、「言語（ラング、langue）」と「発話（パロール、parole）」を、前者に社会的性質、後者に個人的性質を与えて、区別するのである。この社会的なものとしての心的領域が言語であり、そこに「シーニュ」も含まれる。

このことは「声音型」や「思考」と「記号／観念」とを区別したことにその萌芽をみることができる。端的にいえば、「声音型」や「思考」は個人における差異が生じる部分であるから言語たりえないのである。したがって、「記号／観念」が発展して「シーニュ」となるのであって、何度も繰り返

返しているが、「記号」とはそのうちの「シニフィアン」にあたるのである。

記号学に言及する場合、その対象である「記号」を「シニフィアン」にあたるものであると考えるとどうなるだろうか。最初に挙げた記号学の継承者たち（バルトやプリエートら）は、記号自体の理論へと偏り、その過程で触れることはあっても、記号体系自体に問題意識を持つことはさほどないように思われる。しかしながら、『講義』で記号学が「記号がなにかから成りたち、どんな法則がそれらを支配するか³⁴⁾」を明らかにする学問だと定義されているように、記号を構成する媒体やそれらの法則性、つまり体系自体の探求もまた記号学の研究対象なのである。ソシュールは、言語を記号学のモデルとしている以上、記号理論を記号学に応用しようとしていたと考えられる。しかし、反面、記号体系を明らかにすることも重要だとしており、用語の変遷を追ってみると、その鍵となるのが「シニフィアン」なのであると考えられる。ある体系と別の体系との区別はそれぞれに属する「シーニュ」の内、「シニフィアン」の性質によって定められているといえる³⁵⁾のであって、「シニフィエ」は体系の構成には、「シーニュ」の内的分類³⁶⁾にしか関わらない。

バルトは言語学を分解しつつあるものと評して「言語学が扱う内容は、次第に数を増し、次第に言語学本来の領域から離れてゆく（elle [la linguistique] se saisit de contenus de plus en plus nombreux et de plus en plus éloignés de son champ originel)³⁷⁾」という。「シニフィアン」で体系を分類するといえはその前者にあたるように思えるかもしれない。しかし、形式と内容とは相補的に作用するものである。それは言語の通時的研究と共時的研究の関係に等しい。通時的研究は言語のある時点での変化を明らかにするが、共時的研究があってこそ、その時点でなぜ変化が生じたのかが明らかになるのである。ソシュールはその両者を等しく重要視していたからこそ、それまでの通時的研究（比較言語学）に共時的研究の必要性を説いたのであった。同様に、内容（記号作用）の研究に則って形式（記号体系）を見直すことは可能であろう³⁸⁾。そして見直された形式の内容をさらに限定、あるいは拡張していくことも可能だろう。

結局、「シニフィアン」による体系の形式化や意味作用の深化を独立した

ものとみれば、それぞれは逆方向へと歩みを進めるだけである。重要なことは、両者を補い合わせることであって、それがなされれば、体系同士（言語と音韻体系のような）の関係性も分かるのである。文化や慣習を体系的な記号とみれば、個々の研究に、それぞれの関係を考慮することで社会全体の構成を明らかにする一助となる。ソシュールが記号学で探求しようとしたのは「人間社会における記号の生³⁹⁾」でもあるのだから、その意義はソシュールに反するものではないはずである。

注

- 1) この方向性は言語学に限らず構造主義と呼ばれた思想的潮流に多く見られるものである。またこれは必ずしも後者と並立しないわけではない。後者の方向性のもとソシュール理論に新たな解釈・批判をし、それを応用・発展させるという方向性も可能であろう。例えば、バンヴェニスト (É. Benveniste) など。
- 2) この分野を開拓したのものとしてエングラール (R. Engler) の校訂版が挙げられるだろう。またデ・マウロ (Tullio de Mauro) の注解や丸山圭三郎の『ソシュールの思想』における解釈も含まれると考える。
- 3) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bailly et Albert Séchehayé avec la collaboration de Albert Riedlinger, Ed. critique préparée par Tullio de Mauro, postface de Louis-Jean Calvet, Paris, Payot, 2005
- 4) Émile Benveniste, «Sémiologie de la langue», *Problèmes de linguistique générale*, 2, pp. 43-50
- 5) *ibid*, p. 49
- 6) Cf. Louis J. Prieto, *Messages et signaux*, 1972 プリエートのこうした展開は、記号と現実との関係が欠けていたソシュールの理論に、名称目録的ではない、言語に即した新たな指示関係をもたらすものであると考えられる。
- 7) Roland Barthes, «Éléments de sémiologie», p. 106, *Communications / Centre d'études de communications de masse*, n. 4 (1964)
- 8) «...après avoir hésité entre *sôme* et *sème*, *forme* et *idée*, *image* et *concept*, Saussure s'est arrêté à *signifiant* et *signifié*, dont l'union forme le signe. . . » *ibid*, p. 105
- 9) この段では、「シニフィエ」・「シニフィアン」の両者を要素とする全体としての「記号」を用語の混乱を避けるため「シーニユ」とし、それ以前の用法と思われるものは「記号」とする。
- 10) ÉLG, pp. 44-45
- 11) Cf. CLG, p. 99
- 12) CLG, pp. 99-100

- 13) 『講義』におけるシニフィアン・シニフィエの用語の導入理由は用語の曖昧さの解消のためとされている。1911年5月19日の講義（第三回）において、ソシュールは、言語記号という語を用いて、その「恣意性」と「広がり」という特性を述べた5月2日の講義を訂正している。つまり「恣意性」とは、言語記号の「概念」と「聴覚印象」のつながりについての用語であるが、「広がり」とは「聴覚印象」面が時間軸の上を一次元の方向へと広がることを意味するのであって、後者にも言語記号という語を用いれば用語が混乱するのである。よって、シニフィアンとシニフィエの用語をもって「改善 (amélioration)」しようというのである。

Une amélioration peut être apporté à la formule de ces deux vérités en employant les termes de *signifiant* et *signifié*. (CLG3/K, p. 92)

[下線部はデ・マウロの参照したもの (1084 B Engler) によれば ces formules となる]

デ・マウロはこの点を指摘して (Cf. CLG, p. 438, n. 128)、この用語の導入は恣意性の原理の帰結だとしており、単に用語法の曖昧さに言及するだけの『講義』の用語を批判している。

- 14) Cf. 《§ 2. PLACE DE LA LANGUE DANS LES FAITS DE LANGAGE》, CLG, pp. 27-32, etc.
- 15) Cf. CLG, p. 56
- 16) ソシュールにとっての音声学 (phonétique) とは進化 (歴史・比較) 音声学を示すのであって、現代的な意味での音声学 (つまり音声生理学) を示すには音韻論 (phonologie) の用語を用いている。この点はすでに指摘されていることである (ex. Cf. 鈴木隆芳「ソシュールの音声学における音の単位について」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』 pp.37-49, n. 10, 2001) し、またソシュールの以下の言説をみればなお明らかであろう。

La phonétique s'est d'abord exercée à propos de l'évolution des sons dans les différentes langues (c'est le changement historique de *dolore* arrivant à *douleur*). Cela (cette étude du mouvement phonétique à travers temps) n'a rien à voir avec l'analyse des sons dans la parole humaine. La phonétique (au sens de phonétique évolutive) est une étude qui rentre pleinement dans la linguistique.

Cette physiologie des sons de la parole (Lautphysiologie) ne fait pas partie de la linguistique.

On pourrait lui donner le nom de phonologie ou analyse des sons de la parole. (CLG3/K, p. 53、下線強調は引用者による)

- 17) ここの音声学とは史的音声学を指すと考える。
- 18) ソシュールにとっては当然のことではあるが、思考と声音型とは言語 (ここでは観念と記号) を介さずには結合しないため、その関係は含まれない
- 19) CLG1/K, p. 6

- 20) CLG1/K, p. 92
- 21) 第一回講義においても sémiologie という語を使用しているが、具体的にどういふものかと言及するのは第二回講義が最初である。
- 22) Cf. 引用 14
- 23) 《Cours de linguistique générale (1908-1909)》, pp. 14-15, Cahiers Ferdinand de Saussure XV
- 24) ibid, p. 6
- 25) ibid, p. 8
- 26) ibid, p. 15
- 27) ibid, p. 16
- 28) ibid, p. 16
- 29) ソシユールのいう「語る主体」とは、いささかもことばを語る主体ではなく、ことばを聴く主体なのである。そして、主体にとって「聴く」(entendre) ということが、未分化のことばの背後にある<意味>を読みとり、それによって不連続な単位を切りだしていくことである以上、それは同時にことばを「了解する」(entendre) ことにほかならない。したがって、ソシユールのいう「語る主体」とは、「聴く」という行為が「了解する」という行為と共犯的であるかぎりにおいて、<聴く主体> (sujet entendant) なのである。
(立川健二、『<力>の思想家ソシユール』, p. 80)
- 30) CLG3/K, p. 71
- 31) Cf. 注 15
- 32) CLG, pp. 29-30
- 33) CLG3/K, p. 69
- 34) CLG, p. 33
- 35) ここでの分類とは、たとえば言語体系でいう文法範疇のような体系内の分類を指すのではない。
音韻体系と書記記号の体系を分類する要素は一方が「音素」であり、他方が「文字」である。それぞれの要素を混入した文章(「」で区切られるごとに筆談と口話を切り替えるなどして)を作ったとしても話は通じるだろうが、だからといって「音韻」の体系と「文字」の体系は別のものである。それらの行使は言語体系に支えられているが、言語もまたどちらにも属さない自律的な体系である。
- 36) 言語内で記号同士の価値を比べることで生じる分類。たとえば言語体系ならば文法範疇など。
- 37) Cf. Roland Barthes, «Leçon», *Œuvres complètes tome III 1974-1980*, p. 809, Ed. par Éric Marty
- 38) たとえば、デノテーション／コノテーションの理論を応用すれば、言語記号の内容に支えられた、人間の文化の体系化も可能かもしれないことはすでに

バルトの仕事で示されたことである。

39) CLG3/K, p.71